

津つ

島しま

祭まつ

禮り

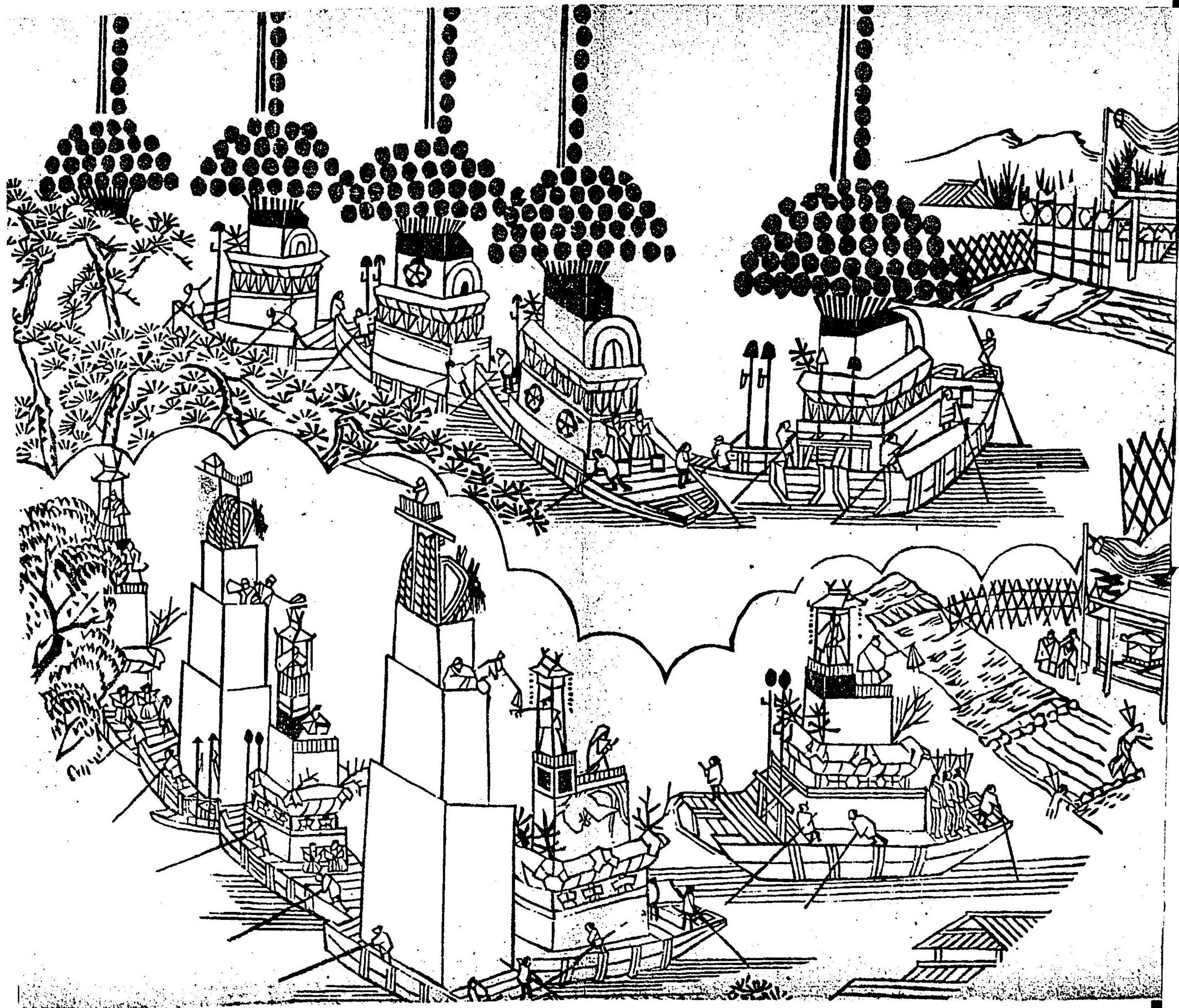
の

由ゆ

は

縁えん

書かき



津島祭禮之由縁書

津島地名之起原畧解

津島地名は藤浪里と稱せしか人皇三十代

欽明天皇元年庚午當神社 速速須佐之

男命對馬國より此里へ來格し玉ふより始て地名を津島とす而して此地は湊にして桑

名四日市等の渡海の如し故に津島渡と稱し東西往來には必ず此湊を通行せしもの

也夫木集中務皇子の歌に「今日の日は錨ろへよと舟人の津島の渡り風もろよのせ」

又鴨長明海道記は建曆元年將軍實朝公拜謁の爲め關東下向の紀行也同紀にも津島渡

のこと見へ又 順徳院の八雲御抄にも津島渡と云と見へて古は歌に記に載せられた

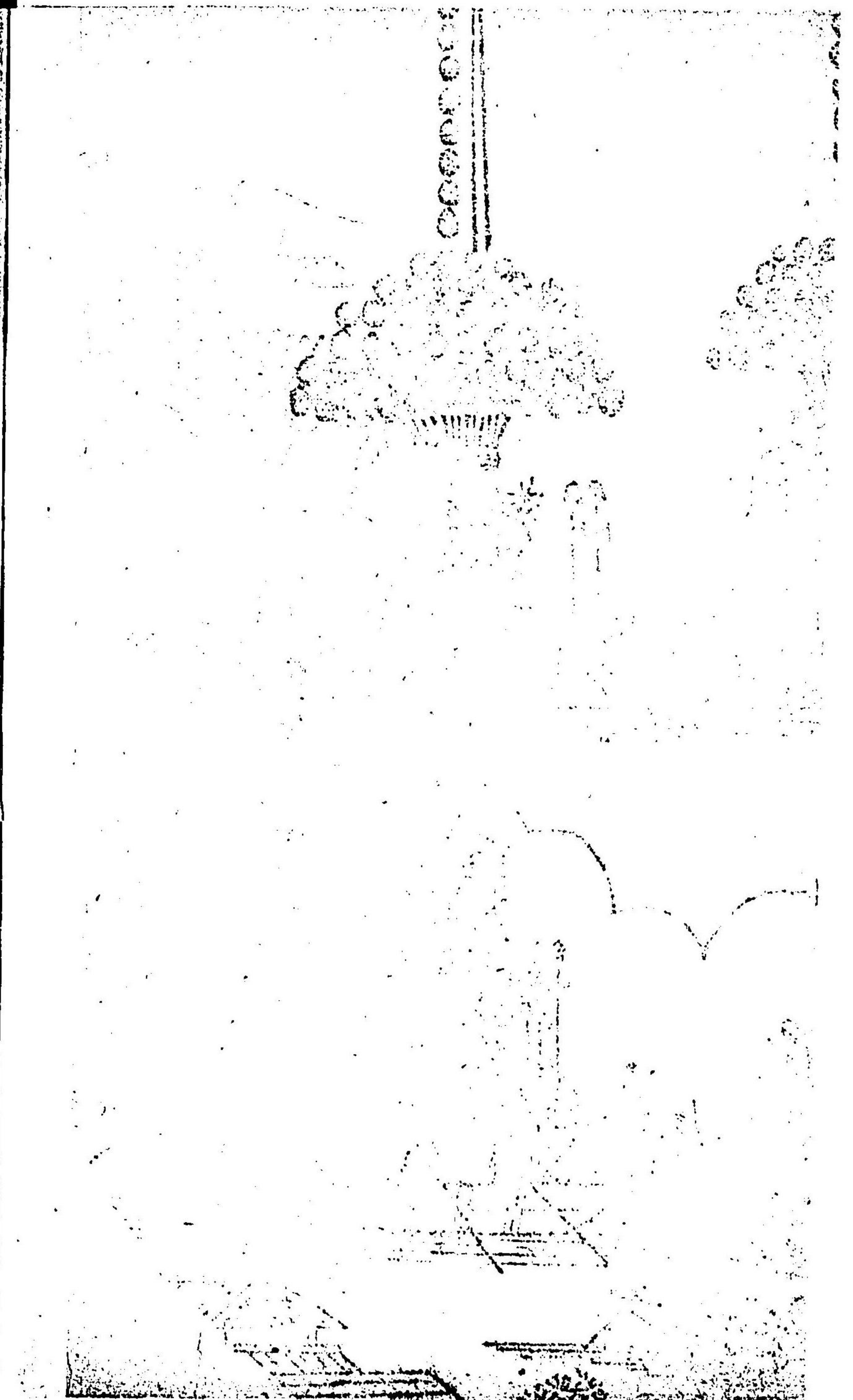
る地なりされは時遷り世變て今は渡りと云ふへき所も見へきなりぬ今上河原船戸片

町笹場など云ふ町名あるは舊跡を知るに足るいづれにも津島の地名は當社鎮坐後な

る事前述たる如し

津島祭禮之元旨

凡る祭典は概て國家の無事を祈るもの也殊に津島祭禮の如きは世の禍事を鎮除す



るに大神此馬津湊に來格の事は古へより深き幽契ある次第にて當時御遷坐の折り市江の邊り原野の僕僮等或は牛に躰居し笛吹き鑼を積み重ね手巾を柄に懸などして娛しく余念なく舞遊びたる状恰も仙童の遊興に似たるを大神甚と御心に嘉し玉ひ且蒼生の爲め避暑の霽祭より始めよと諭し玉ひ其船上の樂は神慮より車樂一成の妙音笛詞を教へ授け玉ふより此樂一成を總て車樂舞津島笛とは喚初るしものなりとぞ

試樂の事

霽祭これを試樂と云ふ試樂とは糸竹の調子笛の音取など云ふ試樂とは違ひ則蒼生烈暑の炎熱を救ひ疫病を除け玉はんとの厚き神慮に起りしものにて所謂信樂の意あると或舊記にあり又これを(まんがく)と云ふは名目抄にあり此霽祭は氏子にて勤むされど車樂の一成津島笛の妙音興起は前段の次第なれば朝祭には市腋の祭船をもて先車と爲せり而して其調聲も亦舊たり市腋の調聲は也平波と云ひ津島は也平瀾と云又車樂船上の燈火は昔年内の月日に準じりた則傘がたの燈三百六十張は一年の日數

(陰曆)に象り真柱俗に如の十二張は一年月數に高欄四傍の三十張は一月の日數に象れり而て五輛船上燈光水に映し水陸觀を改め夜の明けんとするを知らざるの風景なり尙幕政の頃は霽朝とも齋固の士を出張せしめられ鄭重の扱ひあり又大神鎮坐の國は六月の祭禮多し京師の祇園會ると是也噫盛哉

朝祭之事

朝祭は市腋島より車樂船一輛を出す之を市腋の先車と云山車ハ故全時に氏子より全五輛と山車五輛山車俗ニ大山ト云を出す車樂船上には屋形を設け偶人を置く大抵能下には兒の奏樂あり(津島噺子是なり)車樂には神君並に貴顯の衣服幕と交へ懸く又山車は組木を重る數丈十二三間幕を張り上には種々の人形を設く一傳に組木を重るは彼僕僮の簀を重ねたるに象り市腋裸体子の持てる矛は彼柄に手巾を取掛たる遺習とこの傳へのまゝなるにや又は矛竿は古へ神の幣物として捧げたりし例もありて延喜式等にも見ゆ又山車上において蛇形を動かし下には老人夫婦の人形ありこは尊神出雲殿の川の神事を摸したるものにて蛇形は則八岐大蛇老人は足摩抛手摩抛也尙山上にて

祭神の御心をかゝりて正しく神事を行はしむるに山車一輛を出し者十二輛にして即一年の月に象りたるものなりしがあかむるし山車の蛇形精神いり蜂が尻(センボトニフ)と云ふ所にて山車を沈没せしめたり故に十一輛となり今又六輛となりぬ又車樂とは津島笛一成の別譜名目あり尙此祭禮につき十四日より堤上へ神輿渡御あり(寶曆二年中絶せしが明治十二年再興)て此祭禮神輿ありさて朝祭の着岸するや十歳内外の男子大人の頸に乗り上陸すこれを(ちご)と云ふいづれも人目を驚ろかす美麗なる服を着し一祭車若干名神輿に供奉し本社に詣て各雅樂を奏し祭車に歸へる實に兒の愛らしく美はしき状云ふへからす

一説に津島祭の事其法式十一艘を飾り十一黨の家紋を附たる幕を張る此祭りの始りは佐屋村に台尻大隅守と云者あり當時南朝 皇胤にまして亂を津島に避け玉ふ良王君を討奉らんとす此に十一黨は台尻を討つへき策を斗りて此船祭をなす台尻は此を見んとて舉族船に乗り津島に来る而して十一黨の中大橋か船は一會村(市江)より推しいたし相圖を定めて台尻を襲撃し遂に亡しきこゝに皆喜ひ台尻討ちたりと同音に唱ふこれ後世迄津島祭の断子と爲せしとぞ

祭禮準備の事

此祭禮につき前々より左の法式あり
齋竹とは木月朔日未明に祭車を出す町々の境ひに篠付の竹(八寸廻り)二本をたて穢れの者通行を禁づ 手斧始とは山車平日風雨に濕し朽損するを以て之を修理す 敷船とは一輛毎に二艘の割にてもとは御船手有司より廻されたり
綱打は十二日の未明に爲すこれ祭車を積重さぬるの料なり 山揚式は十二日未明なり然るに後世山揚は十三日船割け十二日と爲りしも又初めに復し船割山揚とも十二日となりたりさて此大祭禮は掛巻も畏き建速須佐之男命蒼生炎熱の苦悶を救ひ疫病を除き玉ふ厚き神慮より起因す故に其法式も極て多かれと今は其大綱を記したるのみあり

明治廿三年七月十三日出版

定價每冊五圓

愛知縣平民

編輯人兼
發行人

氷室銑之助

愛知縣尾張國海東郡津島町
大字向島二百八拾八番戶

愛知縣士族

印刷者 山田眞武

愛知縣名古屋市
榮町四拾五番戶寄留

2036

027364-000-3

特14-179

津島祭礼由縁書

水室 銑之助 / 編

M23

ADJ-0120

